

## 『三匹の子ぶた』に関する心理学的研究 (3)

### — 幼稚園児の父親と母親の考える「望ましい物語」について —

筑波大学心理学系 石隈 利紀

筑波大学心理学系 福沢 周亮

筑波大学心理学系 小野瀬雅人

A psychological study of the fairy tale, "Three little pigs"(3): A story preferred by fathers and mothers of infants

Toshinori Ishikuma, Shusuke Fukuzawa, and Masato Onose (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

A questionnaire on a fairy tale, "Three little pigs", was developed by Onose et al. (1993). The questionnaire was given to 82 fathers and 94 mothers of children aged four to six living in a metropolitan area. The questionnaire aimed to examine a story preferred by parents of infants, in which parents made a story by selecting a setting from two choices, a development from two, and an ending from three; and in which they also stated reasons for their preferred choices. The results of the analysis of their responses showed that a majority of both fathers and mothers preferred a "peaceful story". No significant difference was found in any setting between fathers and mothers. The reasons for that findings are discussed in terms of a less clear role difference between fathers and mothers in modern Japan, and in terms of their age.

**Key words:** "Three little pigs", a fairy tale, questionnaire, parents of infants.

#### 問題と目的

「物語と子ども」の関係について考えるとき、物語を介して、それを与える立場の心理と、それを受けとる立場の心理が問題となる。与える立場としては、主に、子どもが生まれたときから育児に関わっている親と、幼児教育という立場で子どもに関わる教師が考えられる。状況によっては、兄や姉など年長の子どもが与える立場にたつこともあるが、ふつうこの立場にたつのは、親や教師であることが多い。

一方、受ける立場としては、主として子どもが該当する。しかし、子どもに与えるのにどのようなものがよいかを知るために物語を読む場合は、前者の親や教師も含まれる。

ところで、福沢・小野瀬・石隈(1992)は、日本で

はもちろん海外でもよく知られている童話『三匹の子ぶた』の日本語版と英語版数編について内容分析を行った。その結果、いくつかの展開パターンが見出され、童話の内容によって伝えようとする「価値観」も異なることが明らかにされた。すなわち、「人生の厳しさに耐えること」「人生の成功」「自立」「勤勉」「協力」「賢さ」という言葉で表現できるような価値を伝えようとしていることが確かめられた。

そこで、小野瀬・石隈・福沢(1993)は、福沢ほか(1992)に基づいて調査用紙を作成し、幼稚園教師を対象として「子どもに与えるのに望ましい物語」について検討した。調査用紙は、導入、展開、結末の3つの部分についてそれぞれ異なる内容のパターンから構成される。導入は、三匹の子ぶたが家を出て

いく理由で、「家が貧乏で育てきれないため家を出される」話と「大きくなったのだから自分で家を建てるようにと家を出される」話の2パターン。展開は、「オオカミが現れ、三匹の子ぶたの家を襲い、一番目の子ぶたと二番目の子ぶたが食べられてしまう」話と「オオカミが現れ三匹の子ぶたの家を襲うが、子ぶたは兄ぶたの家に逃げる」話の2パターン。結末は、3番目の子ぶたが建てたレンガの家を襲うために「煙突から忍びこんだオオカミは、煮立った鍋の中に落ちて死んでしまい、それを子ぶたが晩ごはんに食べてしまう」話、「煙突から忍びこんだオオカミは、煮立った鍋の中に落ちて死んでしまう」話、そして「煙突から忍びこんだオオカミは、煮立った鍋の中に落ちて大火傷をして逃げ帰った」話の3パターンである。

以上の内容から構成される質問紙によって、導入・展開・結末それぞれ2つか3つある選択肢から1つずつを選び、子どもに与えるのに望ましい物語をつくるよう幼稚園教師に求めたところ、保育経験の長い「ベテラン教師」では、残酷でも教訓として残る物語を「子どもに与えるのに望ましい」とする傾向があったが、逆に保育経験の短い「若手」教師では、残酷な内容は避け、協力や優しさを強調した内容を選ぶ傾向が認められた。

このように「教師」の立場からの「子どもに与えるのに望ましい」物語の在り方は明らかになったが、冒頭でも述べたように、物語を与える立場として「親」の立場もある。とくに親の場合は、比較的多くの時間を幼児とともに過ごす「母親」の立場と、逆に「仕事」の世界で大部分の時間を費やす「父親」の立場の二つがある。「教師」とは別に、これらの立場でも「与えるのに望ましい」物語に差異があると考えられる。なぜなら、実際に、厳しい社会の中で働く父親の場合は、子どもにたくましく育つことを願うがゆえに、多少残酷でも厳しい話を選ぶと考えたからである。女性の社会進出が増えたとはいえ「母性」と「父性」の差異が「望ましい物語」にも反映するのではないだろうか。

しかし、こうした仮説が成立する一方で、最近では父親と母親の家庭における「役割」の稀薄化が、様々な立場の研究者から指摘されている(深谷, 1990; 荻村, 1983; 小高, 1993)。例えば、1960年代あたりから、それ以前の日本の家族の特性であった「父親の子に対する『きびしさ』と「母親の子に対する『やさしさ』」といった役割が崩壊し、とくに父親が「やさしさを売り物にする」存在になってしまった、という見方もある(荻村, 1983)。この背景には、核家族や共働き夫婦の増加といった家族

構造の変化も考えられるが、こうした要因も、子どもに与えるのに望ましい物語に影響するかもしれない。

いずれの考え方も、もっともな見方ではあるが、実際に子どもに物語を与えるという場合はどうであろうか。たとえ「やさしい父親」であっても子どもに伝えたいものは、「世間の厳しさ」であるかもしれない。

以上の理由から、本研究では「親」の立場からみた「子どもに与えるのに望ましい物語」について調べることにした。具体的には「父親」と「母親」の二つの立場から「子どもに与えるのに望ましい」と考える物語について調査し、比較検討することを目的とした。

## 方法

**調査年月** 1992年7月, 1992年12月。

**調査対象** 千葉県柏市の私立幼稚園に通園する幼児の父母 176名〔父親82名(平均年齢36.68, SD=4.39); 母親94名(平均年齢33.88, SD=2.92)〕。したがって、本調査の調査対象は首都圏に在住で、4~6歳の子どものもつ父親と母親ということになる。

**調査用紙** 小野瀬・石隈・福沢(1993)で用いたものと同じ。すなわち、福沢・小野瀬・石隈(1992)の行った『三匹の子ぶた』の英語版4編と日本語版5編の内容分析の結果をもとに内容を類型化し、その基本構造だけを残したものを用いた。これらは物語の枝葉末節を削除し、場面設定2パターン、展開2パターン、結末3パターンから構成され、それぞれの段階でもっとも好ましい内容を選択するものである(付録1参照)。

実際に配布する調査用紙も小野瀬ほか(1993)と同様、それぞれの段階にある選択肢の順序を入れ替えた4パターンが用いられた。

**手続** 調査用紙は園児を通して各々の家庭に配布され、園児の父母に回答してもらい、約1週間後に回収するという形式をとった。なお、同時に父母の調査をするとそれぞれの回答内容に影響がでると考えたため、約半年間、時間をずらして回答を求めることにした(実際には、母親が7月、父親が12月に回答した)。

## 結果と考察

本調査用紙には全部で3つの選択項目が設けてある。初めは、物語の導入の部分、次は展開の部分、そして最後が結末ということになる。それぞれの選択肢は、導入2つ、展開2つ、結末3つとなっている。さらに、選択肢を選んだ理由と、このような「す

じ」にした理由を書くよう求めているが、その考察もここで行うことにする。

### 1 導入

父親、母親で「貧乏で仕方なく家を出される」厳しい内容のAを選んだ者は、それぞれ3名(4.8%)と2名(2.1%)。一方、「母親に励まされ元気に家を出ていく」Bを選択した者は、それぞれ79名(95.2%)と92名(97.2%)であった(Table 1)。

そこで2(父親・母親)×2(選択肢A・選択肢B)の表に基づき直接確率計算を行ったところ、 $p = .8711$ (両側検定)で人数に有意な偏りは認められなかった。したがって父親・母親の相違と選ばれる選択肢に関連性はないといえる。さらに父親と母親の人数を込みにし、選択肢AとBを選択した者の人数の偏りを直接確率計算により検定したところ、有意な偏りが認められた(両側検定; $p = .0000$ )。以上のことから、父親母親ともに選択肢Aよりも選択肢Bを選ぶ者が多いといえる。

次にそれぞれの選択肢を選んだ理由をみていくことにする。Table 2に示すとおり、Aを選択した理由をみると、「リアリティーがある」「子ども自身が努力するよう」「子どもが安心できる」等、必ずしも一貫性のある回答はみられない。しかし、Bを選択した理由をみると、「自立心を育てる」という物語の肯定的な側面を評価した結果と、「貧乏を伝えるのは難」と逆に選択肢の他方(ここではA)の物語を否定的に評価した結果の2つに多くの回答が集中している。母親では「明るい」とか「親の優しさを感じる」といった回答もみられるが、いずれにせよ、「厳しさ」「残酷さ」のある話は避けたいのが親の側の本音といってもよいだろう。

### 2 展開

導入と同様、父親母親ともに「子ぶたが一匹ずつオオカミに食べられる」展開Aを選んだ者は、それぞれ4名ずつ(父親4.8%;母親4.3%)であっ

Table 1 各選択肢で選ばれた物語の要素とその人数(%)

	選択肢①		選択肢②		選択肢③		
	A	B	A	B	A	B	C
父親	3 (4.8)	79 (95.2)	4 (4.8)	78 (95.2)	1 (1.2)	10 (13.1)	71 (85.7)
母親	2 (2.1)	92 (97.9)	4 (4.3)	90 (95.7)	1 (1.1)	7 (7.4)	86 (91.5)
合計	5 (3.4)	171 (96.6)	8 (4.5)	168 (95.5)	2 (1.1)	17 (9.6)	157 (89.3)

Table 2 質問①の選択理由

母親		父親					
A	リアリティーがある表現がきついためから	1	1	A	子供自身が努力するよう自立をすすめている	1	1
					子どもが安心できる		1
					意味不明		1
B	無記入	2	2	B	無記入		3
	自立心を育てる	50	50		自立心を育てる		31
	貧乏を伝えるのは難	17	17		貧乏を伝えるのは難		20
	物語が明るい	10	10		子供向けの話だから		11
	親の態度が問題	3	3		残酷な話は避けてたい		2
	親の優しさを感じる	2	2		以前読んだ本と同じ		1
	親子関係として自然	1	1		その他		4
	以前読んだ本と同じ	5	5		意味不明		6
	意味不明	2	2				
合計		94	94	合計		82	82

た。一方、「子ぶたがオオカミに襲われると兄弟ぶたのもとへ逃げる」展開Bを選んだ者の方は、父親、母親それぞれ78名(95.2%)と90名(91.5%)であった(Table 1)。

そこで前項と同様、2(父親・母親)×2(選択肢A・選択肢B)の表に基づき直接確率計算を行ったところ、 $p = .9999$ (両側検定)で人数に有意な偏りは認められなかった。したがって、展開においても導入と同様、父親・母親の相違と選ばれる選択肢に関連性はないといえる。さらに父親と母親の人数を込みにし、選択肢AとBを選択した者の人数の偏りを直接確率計算により検定したところ、導入と同様有意な偏りが認められた(両側検定; $p = .0000$ )。

以上のことから、父親母親ともに選択肢Aよりも選択肢Bを選ぶ者が多いといえる。

前項と同様、次にA、Bそれぞれの選択肢を選んだ理由をみていくことにする(Table 3)。展開でも導入と同様、Aを選択した者は「話が明解」「現実的」「自然」「緊迫感がある」など、比較的冷静な判断をしているようである。一方、Bを選択した者は、「他方(A)が残酷だから」という否定的な理由を父親母親ともに最も多く挙げ、次に「兄弟の協力する姿」という肯定的な理由をあげている。父親母親関係なしに、親の立場としては、子ぶたが一匹ずつ食べられていく話は残酷なものとして理解し、それを子どもに与えるのに相応しくないと考えているようである。

### 3 結末

これには3つの選択肢が用意されている。最も「残酷」な「煙突から侵入しようとしたオオカミは煮立っ

Table 3 質問②の選択理由

母親		父親	
A 本来の昔話どおり	1	A 自然であるから	3
話が明解	1	緊迫感がある	1
現実的だから	2		
B 無記入	3	B 無記入	2
残酷だから(他方が)	35	残酷だから(他方が)	32
兄弟の協力する姿	19	兄弟の協力する姿	24
話を楽しくするため	5	子どもの話として適切	4
以前読んだ本と同じ	4	話に夢がある	2
努力する姿がよい	3	ストーリー性がある	2
自立心を育てる	1	努力する姿がよい	1
その他	16	以前読んだ本と同じ	1
意味不明	4	その他	10
合計	94		82

Table 4 質問③の選択理由

母親		父親	
A 本来の昔話どおり	1	A 自然だから	1
B 以前読んだ本と同じ	1	B 因果応報を伝えたい	3
子どもが安心する	1	残酷だから(他方が)	2
因果応報を伝えたい	2	自然だから	2
適度な厳しさがある	1	その他	3
原作どおり	1		
内容が適切でない	1		
C 無記入	3	C 無記入	2
残酷だから(他方が)	20	残酷だから(他方が)	24
童話に相応しい	13	死や殺は避けたい	12
悪人に反省の機会を	9	童話に相応しい	5
死・殺は避けたい	6	因果応報を伝えたい	4
死を理解できない	4	以前読んだ本と同じ	1
以前読んだ本と同じ	3	その他	23
因果応報を伝えたい	3		
話の発展性がない	2		
その他	23		
合計	94		82

た鍋に落ち死んでしまい、それを子ぶたが食べてしまう」という結末は、父親母親ともに1名ずつで、次に残酷な「煮立った鍋に落ちて死んでしまう」結末は父親10名、母親7名であった。最も「穏やか」な結末である「オオカミが火傷を追い逃げ帰る」は、3つの選択肢のなかで最も多く、父親71名(85.7%)、母親86名(91.5%)であった(Table 1)。

選択肢Aの選択者数は父親・母親ともに1名であるため、2(父親・母親)×3(選択肢A, B, C)の表に基づく $\chi^2$ 検定ができない。そこで、選択肢AとBを合わせ、2(父親・母親)×2(選択肢A・

B, C)の表に基づく直接確率計算により関連性の検定を行うこととした。その結果、直接確率 $p = .4221$ (両側検定)で有意な偏りは認められなかった。さらに、父親と母親の人数を込みにし、選択肢A・BとCを選択した者の人数の偏りを直接確率計算により検定したところ、有意な偏りが認められた(両側検定;  $p = .0000$ )。

以上のことから、父親母親ともに選択肢A・Bよりも選択肢Cを選ぶ者が多いといえる。

次に選択肢A, B, Cそれぞれを選んだ理由をみると、とくにBでは「因果応報を伝えたい」とする回答が父親母親ともに少数ながらみられた(Table 4)。これは他の回答とも意識の深いところで共通するものがあると考えられるが、「悪い事をすれば必ず罰がある」ということをやや厳しい表現で子どもたちに伝えようという意思があるものと解釈できる。

一方、Cを選択した理由をみると、父親母親ともに「他方(AとB)が残酷だから」という否定的な理由が最も多かった。その他「死や殺すといったものは避けたい」「童話として相応しい」という理由も目立った。いずれも父母の間で人数に多少のばらつきはあるが、共通して多くの者があげている点に興味深い。父親、母親に固有の理由がみあたらないのである。

#### 4 選択された物語の「すじ」

父親と母親が選んだ「物語のすじ」は、BBCというパターンがもっとも多く、それぞれ、68名(81.9%)と84名(89.3%)であった。以下選んだ人数の多い順にみると、父親母親ともに、BBB〔それぞれ7名(9.5%); 5名(5.3%)〕, BAB, ABC, BAC, という順で、AAA, AAB, BBAは父親か母親のどちらか一方が1名選んだだけであった。(Table 5)

父親母親ともに度数が5以下のセルが多いため、BBC以外の選択肢を選んだものを込みにし、BBCを選んだ者の度数との間で検定を行った。2(父親・母親)×2(BBC, BBC以外)の表に基づく直接確率

Table 5 選択された物語のすじとその人数(%)

	AAA	AAB	ABC	BAB	BAC	BBA	BBB	BBC	計
父親	0	1	2	2	1	1	7	68	82
		(1.2)	(3.6)	(2.4)	(1.2)	(1.2)	(9.5)	(81.9)	
母親	1	0	1	2	1	0	5	84	94
	(1.1)		(1.1)	(2.1)	(1.1)		(5.3)	(89.3)	
合計	1	1	4	4	2	1	12	152	177
	(0.6)	(0.6)	(2.3)	(2.3)	(1.1)	(0.6)	(6.8)	(85.7)	

計算による検定の結果、有意な偏りは認められず(両側検定;  $p = .3074$ )、したがって父親母親ともに選択肢の選択に関連性があるとはいえない。

さらに、父親と母親の人数を込みにし、BBCを選択した者とそれ以外を選択した者の人数の偏りを直接確率計算により検定したところ、人数に有意な偏りが認められた(両側検定;  $p = .0000$ )。

以上のことから、父親母親ともにBBCを選ぶ者の人数は、それ以外の選択肢を選ぶ者よりも多いといえる。

また、これらの「すじ」を小野瀬ほか(1993)にしたがって物語の展開別に分類したものがTable 6に示してある。これは、子ぶたとオオカミの生死により4類型に分けたものである。類型Iは子ぶたもオオカミも死ぬことはない「平和な」物語で、展開パターンABCとBBCが該当する。類型IIは子ぶたは生き残るがオオカミは死ぬ物語で、展開パターンABB, ABA, BBA, BBBが該当する。類型IIIは子ぶたは死ぬがオオカミは生き残る「無情な」物語で、展開パターンAACとBACが該当する。最後に類型IVは、子ぶたもオオカミも死ぬ最も「残酷な」物語で、展開パターンAAA, AAB, BAA, BABが該当する。

これらの分類にしたがって、選んだ父母の人数をみると、「残酷な展開」の類型IV(AAA, AAB, BAA, BAB)は、父親母親それぞれ4名と3名で両者を合わせても全体の4.0%にすぎない。一方、「平和な展開」の類型I(BBC, ABC)は、父親母親それぞれ70名と85名で、両者を合わせると155名で全体の88.0%に及んだ。したがって、大部分の父母は残酷な場面のない「平和な展開」を好むといえる。

次に「このような『すじ』にした理由」についてみていくことにする(Table 7)。類型IとIV以外はいずれも選んだ者が少数であるため割愛するが、ここでも前項と同様、「残酷な話は避けたい」という他の選択肢を否定的に判断し「消去法」でこの「すじ」になったという者が多かった。肯定的な面に注目してこの「すじ」になったという者は、主に「努力や協力の大切さを伝えたいから」という理由に集

Table 6 内容別の「選択されたすじ」の分類結果

	類型I		類型II			類型III			類型IV			
	ABC	BBC	ABB	ABA	BBA	BBB	AAC	BAC	AAA	AAB	BAA	BAB
父親	2	68	0	0	1	7	0	1	0	1	0	2
母親	1	84	0	0	0	5	0	1	1	0	0	2
合計	3	152	0	0	1	12	0	2	1	1	0	4

Table 7 質問④「このような『すじ』にした理由」

母親		父親	
【類型I】(平和な物語)			
ABC	1	ABC	2
残酷な話は避けたい	(1)	協力の大切さを伝えたい	(1)
		「死」の話は子供に与えたくない	(1)
BBC	84	BBC	68
無記入	(6)	無記入	(3)
残酷な話は避けたい	(1)	残酷な話は避けたい	(14)
努力の大切さを伝えたい	(5)	努力の大切さを伝えたい	(1)
協力の大切さを伝えたい	(11)	協力の大切さを伝えたい	(15)
努力と協力の大切さを…	(11)	自立心を育てたい	(1)
子供に夢を与えたい	(3)	子供に夢を与えたい	(7)
自然だから	(2)	自然だから	(6)
話に発展性がある	(2)		
因果応報を伝えたい	(2)	因果応報を伝えたい	(2)
死なしても主旨は伝わる	(2)		
以前読んだ本と同じ	(8)	以前読んだ本と同じ	(4)
消去法で選んだ	(1)		
その他	(23)	その他	(15)
【類型II】(理由省略)			
BBB	5	BBB	1
		BBB	7
【類型III】(理由省略)			
BAC	1	BAC	1
【類型IV】(残酷な物語)			
AAA	1	AAA	0
イギリスの昔話がそうだから		何事も計画的に進めなければならないこと、危機に直面したとき機転をきかせ焦らず対処すれば乗り越えること、欲をかきすぎると失敗することなどが物語を通してわかる。	
BAB	2	BAB	2
現実で味わえないスリル		子ぶたとオオカミの自然の中での生存競争をどのようにするか、中途半端なすじでなく明瞭な形で進めたい。(1)	
		あまりに現実から離れるのはよくない。(1)	
合計	94		82

中した。また、「子どもに夢を与えたい」という理由も、父母ともに目立った。このように、親の立場としては、残酷さや厳しさのある「本音の社会」については目を閉じ、子どもたちには、皆が仲よく力を合わせ、また一人ひとりも努力することの大切さを説き、同時に夢を与えるお話を与えたいというのが本音のようである。

## 5 子どもに望む「将来の人間像」

質問項目の最後に、「お子さんにどんな人になってほしいか」という問いを用意した。この質問の意図は、現代の父親母親がどのような教育観をもって子どもを育てているのかを知り、またそれが「三匹の子ぶた」の物語とどう関連するかを知ることであった。

結果をみると、最も多くの父母があげた「優しい人になってほしい」は、BBCを選んだ父母の半数以上で〔父親37名(54.4%)、母親56名(62.8%)〕、回答全体の中でみても、父親49名(59.0%)、母親59名

Table 8 質問⑤「子どもにどんな人になってほしいか」

母親		父親	
<b>【類型Ⅰ】(平和な物語)</b>			
A B C (自立した優しい人)	1	A B C (思いやりのある優しい人)	2
B B C 無記入	84 (1)	B B C 無記入	68 (2)
思いやりのある優しい人	(56)	思いやりのある優しい人	(37)
自立した人	(15)	自立した人	(9)
広い心・素直な心の人	(9)	たくましい元気な人	(6)
その他	(3)	努力する人	(4)
		その他	(10)
<b>【類型Ⅱ】</b>			
B B B 柔軟性のある人	5 (2)	B B A (思いやりのある優しい人)	1
自立した人	(2)	B B B	7
冒険できる人	(1)	自立した優しい人	(6)
		心の強い人	(1)
<b>【類型Ⅲ】</b>			
B A C(心の強い人)	1	B A C(特技のある人)	1
<b>【類型Ⅳ】(残酷な物語)</b>			
A A A(自立した人)	1	A A B(状況判断のできる人)	1
B A B(自立した優しい人)	2	B A B(冷静な判断力と優しさのある人)	2
合 計	94		82

(62.8%)と過半数を占めた(Table 8)。次に多かったのは「自立した人」で、父母ともに全体の約1割(父親15名; 母親20名)だったが、それ以外は数名ずつしかいなかった。

なお、父親に特徴的な回答では、「状況判断のできる人」「たくましい元気な人」「努力する人」などがみられたが、いずれも少数であった。また母親に特徴的なものでは、「広い心、素直な心の人」というものがあつた。

## 6 まとめと今後の課題

物語の導入、展開、結末それぞれの選択者数をみると、いずれも父親と母親で選択肢を選ぶ方向に差はみられなかった。また、物語の展開パターンをみても、子ぶたもオオカミも死ぬことがない「平和」な物語が好まれるという結果となった。

それぞれの選択理由をみても父親母親共通にみられるのは、「残酷な話は避けたい」「協力の大切さ」といったものに集中した。さらに、前項でみたように、「子どもにどんな人になってもらいたいか」という質問に対しては、父親母親ともに「優しい人」「自立した人」が過半数を占めたが、これらはいずれも、上述のような「こうしたすじにした理由」にも反映されている。

それでは、なぜ、父親と母親では、物語の選択においても子どもに望む人間像においても、同様の傾向が現れたのであろうか。

まず第一に考えられるのは、本稿の「問題と目的」でも述べたように、家族における父親と母親の役割

が相対的に稀薄になってきたというものである。つまり、従来、父親は「家長」ということばに象徴されるように、家の中でリーダーシップをとる威厳のある存在であった。一方、母親は、「母性本能」などの言葉に象徴されるように、「優しい」「受容的」存在であった。しかしながら、最近の研究にみるように、核家族や共働き夫婦の増加とともに、それぞれの子どもに対する父母の役割が不明瞭になってきた(深谷, 1990; 荻村, 1983; 小高, 1993)。その結果、父親や母親が「子どもに与えるのに望ましいと考える物語」にも、差が現れなかったものと考えられる。

第二は、世代差の影響である。父親と母親の平均年齢をみると、被調査者の大半は昭和30年代生まれということになる。この世代は、学生運動の嵐も沈静化した後の高度経済成長期に青年期を送っており、理想より現実を重視する。その特徴は「自分自身は『やさしく』見られたく、またそれを求める」「優しさ志向」にある(竹村, 1981)。つまり、父親や母親の育った「時代」が、「残酷さのない」「協力」を大切にすることを訴える物語を選ぶ背景になったという考え方である。

ちなみに、この世代差の影響は、幼稚園教師を対象とした調査結果にも現れている(小野瀬ほか, 1993)。すなわち、幼稚園教師としての経験年数の少ない教師ほど、こうした「優しさ志向」がみられたのである。これに関しては、幼児に接する経験が増えると、世代の影響が薄れるのか否かも含めた検討も必要だが、いずれにしても興味深い問題である。

最後に今後の課題についてひとつだけ述べておきたい。それは、サンプリングの問題である。本調査においては、首都圏の一地域にある幼稚園に通う園児の父母のみを対象としている。したがって、結果の一般性については限界がある。つまり、地方に比べれば、家族構成や職業構成なども異なっていると考えられるので、今後は、こうした要因の異なる地域での幼稚園児の父母を対象とした検討も必要であろう。また、地域によっては、3世代同居という家族構成が一般的である場合も考えられる。その場合は、祖父母と父母では、幼稚園段階の子どもに与えるのに「望ましい物語」についての考え方も異なるかもしれない。こうした世代の影響の検討も必要であろう。

## 引用文献

深谷和子 1990 子どもの中の父親像・母親像 — 二人親の時代へ— 児童心理 44, 金子書房

Pp.1476-1481.

福沢周亮・小野瀬雅人・石隈利紀 1992 「三匹の子ぶた」に関する心理学的研究(1)－物語の構造と伝えられる価値観の分析を中心に－ 筑波大学心理学研究, **14**, 45-53.

荻村昭典 1983 現代の若者と「やさしさ」コミュニケーション 青年心理 **40**, 金子書房, Pp.537-544.

小高 恵 1993 親子関係の年代的推移－25年前と現在の親子関係についての正準判別構造と平均・標準偏差の比較－ 教育心理学研究 **41**, 192-199.

小野瀬雅人・石隈利紀・福沢周亮 1993 「三匹の子ぶた」に関する心理学的研究(2)－幼稚園教師の考える「望ましい物語」について－ 筑波大学心理学研究, **15**, 113-123.

竹村健一 1980 優しさ志向 時代感覚用語の解説, 現代用語の基礎知識 自由国民社 p.919.  
－1993.9.30受稿－

## 付 記

本論文の作成にあたり、千葉県柏市学校法人くるみ学園くるみ幼稚園の先生方ならびに園児の父母の皆さんにご協力いただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

## 付録 1

(本研究は、父親と母親のみを調査対象とした.)

【1枚目】

お父さん、お母さん、先生方へ

私たちは、現在、童話の研究をしています。

このたび、下記の調査を計画いたしました。

よろしくご協力のほど、お願い申し上げます。

筑波大学心理学系

福沢 周亮

石隈 利紀

小野瀬雅人

### 童話『三びきの子ぶた』に関する調査

次のページにあるお話は、「三びきの子ぶた」とか「プー・プー・ウー」として、皆さんによく知られているものです。

お父さん、お母さん、先生方が、ご自分のお子さんや園児に、このお話を読んで聞かせたり、本として与える場合、どのような内容(すじ)がよいとお考えになりますか。望ましいとお考えになるお話のすじを、A, B, C, それぞれの中から選んで、お話を完成して下さい。

なお、それぞれ(A, B, C)を選んだ理由、また、そのようなお話のすじにした理由については、3ページの質問用紙にご記入下さい。

【2枚目】 付図参照

【3枚目】

■ 次の質問にお答え下さい。

- 1) ①で[AまたはB]を選んだ理由をお書き下さい。
- 2) ②で[AまたはB]を選んだ理由をお書き下さい。
- 3) ③で[A, BまたはC]を選んだ理由をお書き下さい。
- 4) このようなお話のすじにした理由をお書き下さい。
- 5) お子さんあるいは園児に、どのような人になってほしいと思いますか。

■ 回答された方(ご本人)についてお書き下さい。

年齢 歳  
性 男・女  
(○で囲んで下さい)

■ お子さんの人数をお書き下さい。( )人

年長のお子さんから、性別と年齢をお書き下さい。

① \_\_\_ (才) ② \_\_\_ (才) ③ \_\_\_ (才) ④ \_\_\_ (才)

☆ご協力ありがとうございました☆

■どのような内容(すじ)がよいと思いますか。A B Cから選んでお話を完成して下さい。

(答は〔 〕の中に書いて下さい。)

むかし、あるところにお母さんぶたと三びきの子ぶたが住んでいました。

A
お母さんぶたはびんぼうで、子どもたちを育てきれなくなって、自分でくらししていくように三びきをよそに出しました。

B
ある日お母さんぶたが言いました。「おまえたちも大きくなったのだから、自分の家をたてなさい。」お母さんにはげまされて、三びきの子ぶたたちは元気に家を出ていきました。

① ( )

A
一番目の子ぶたは、畑からわらを集めてきて、あつという間にわらの家をたててしまいました。すると、まもなく、おおかみがやってきて戸をたたきました。「子ぶた、子ぶた、おれを入れとくれ。」「だめ、だめ、だめ。めっそうもない。」「そいじゃ、ひとつ、この家をふき飛ばしてしまおうぞ。」そう言っ、家をふきとばし、子ぶたを食べてしまいました。

B
一番目の子ぶたは、畑からわらを集めてきて、あつという間にわらの家をたててしまいました。すると、まもなく、おおかみがやってきて戸をたたきました。「子ぶた、子ぶた、おれを入れとくれ。」「だめ、だめ、だめ。めっそうもない。」「そいじゃ、ひとつ、この家をふき飛ばしてしまおうぞ。」そう言っ、家をふきとばしてしまつたので、二番目の子ぶたの家に、にげこみました。

② ( )

二番目の子ぶたは、木のえだを集めて、木で家をたてました。すると、また、おおかみがやってきて戸をたたきました。「子ぶた、子ぶた、おれを入れとくれ。」「だめ、だめ、だめ。めっそうもない。」「そいじゃ、ひとつ、この家をふき飛ばしてしまおうぞ。」そう言っ、家をふき飛ばし、子ぶたを食べてしまいました。

二番目の子ぶたは、木のえだを集めて、木で家をたてました。すると、また、おおかみがやってきて戸をたたきました。「子ぶた、子ぶた、おれを入れとくれ。」「だめ、だめ、だめ。めっそうもない。」「そいじゃ、ひとつ、この家をふき飛ばしてしまおうぞ。」そう言っ、家をふき飛ばしてしまつたので、二匹の子ぶたは、三番目の子ぶたの家ににげこみました。

三番目の子ぶたは、れんがをたくさん集めて、れんがの家をたてました。「子ぶた、子ぶた、おれを入れとくれ。」「だめ、だめ、だめ。めっそうもない。」「そいじゃ、ひとつ、この家をふき飛ばしてしまおうぞ。」そう言っ、家をふき飛ばそうとしましたが、今度は、家はふき飛びませんでした。

三番目の子ぶたは、れんがをたくさん集めて、れんがの家をたてました。「子ぶた、子ぶた、おれを入れとくれ。」「だめ、だめ、だめ。めっそうもない。」「そいじゃ、ひとつ、この家をふき飛ばしてしまおうぞ。」そう言っ、家をふき飛ばそうとしましたが、今度は、家はふき飛びませんでした。

おおかみは、すっかりおこってしまい、今度はだんろのえんとつからおおりていって、子ぶたを食べようとした。そこで、子ぶたはだんろで火をもち、火なべにぐらぐらお湯をわかしました。

A
えんとつからのびこんだおおかみは、にたったなべの中に落ちて死んでしまいました。そして子ぶたは、それをばんごはんに食べてしまいました。

B
えんとつからのびこんだおおかみは、にたったなべの中に落ちて死んでしまいました。

C
えんとつからのびこんだおおかみは、にたったなべの中に落ちて、大やけどをしてしまいました。そのあと、おおかみは、にげて帰り、二度とあらわれませんでした。

③ ( )

その後、子ぶたはずっと幸せにくらししました。



## 付録2 それぞれの選択肢を選んだ理由 (代表的なものを一部抜粋)

☆対象：幼稚園児の父親 82名

### ■選択肢①で「A」を選んだ理由

○自分自身で努力して生きていくように。

### ■選択肢①で「B」を選んだ理由

- 家を立てさせた理由が自立を目指しているから[自立心を育てる]
- 現代の子どもに話として合わない(貧乏の場合は)現実感がない。
- やさしさがあるから。
- 親の都合で子どもをよそにだすのは、幼い子にとっても過酷[親としての思いやりがない]。
- 自分が昔聞いた話だったから。

### ■選択肢②で「A」を選んだ理由

○オオカミの目的は子ぶたを食べることであり、努力の足りなかった者が食べられてしまうのは自然の成り行きと思った。

### ■選択肢②で「B」を選んだ理由

- 子ぶたが食べられてしまうのは残酷。
- 3匹の兄弟愛、自立しても自己本位にならず助け合うことの大切さが書かれているから。
- 子どもたちに聞かせる話としては死を連想・イメージさせるのは感心しない。童話では夢を与えるべき。
- 失敗にくじけないことの大切さを伝えている。
- 追いかけるオオカミ、逃げる子ぶたの躍動感がある。

### ■選択肢③で「A」を選んだ理由

○自然の世界では残酷なものがある。悪い事をしては絶対にいけない。

### ■選択肢③で「B」を選んだ理由

- 二度は許せるが、三度、四度も悪いことをする者は許せない。社会の犯罪みたいなもの。そうしないと、また繰り返すことになる。
- Aとした場合、逃げて帰ったオオカミは本当に来ないかという疑問はどうしても残る。、食べるというのは残酷である。死ぬということもショッキングであるはずだが、死んだことの意味を考えさせる意味でもAやCとするよりずっとよい。
- オオカミがぶたを食べるのは自然だが、ぶたがオオカミを食べるのは自然でないと思うから。

### ■選択肢③で「C」を選んだ理由

- 悪い者に反省を促しているから、更生のチャンスを与えるべき。
- 子どもに安易に「死」を語るべきではないと思うので。
- 煮立った鍋の中に落ちるだけでも強烈なインパクトがあるのに、「死んだ」というのは幼い子供に聞かせるのに難あり。
- あまり悪いことばかりしていると、必ずあとで自分に災難が降りかかってくる、という教訓が表されている。
- 命の大切さ。

### ■このようなお話の「すじ」にした理由

#### AABを選んだ理由

- 何ごとをもよく考えて、計画的に物事を進めたいかねばならない事と、危険に面した時に機転をきかせてあせらず対処すれば、その危機を上手に逃れられるという事、また欲をかきすぎると(こ

でさえ2匹食べている事がより説得力を生む)失敗する事、そして母ぶた、それぞれの子ぶた、オオカミのそれぞれの立場を考えたさせること。

#### ABCを選んだ理由

- 「死」というものを軽々しく口にだす、あるいはストーリーで取り扱うことは、小さな子供にとって何のプラスもないと思う。

#### BABを選んだ理由

- 子ぶたとオオカミは遊んでいたのではなく、自然の中での生存競争だったと思う。どのようになるか中途半端なすじでなく、明確にすじを進める方がよい。

#### BACを選んだ理由

- オオカミはそんな甘くないから。

#### BBAを選んだ理由

- いじめはいけない事、でも兄弟「力」を合わせれば、やっつけられる。いじめた方は、罰がある。

#### BBBを選んだ理由

- 人は誰も失敗することがあるが、その経験を次の機会に生かして、同じ過ちを繰り返さなければ良いとの教訓の話にしたかった。

#### BBCを選んだ理由

- 親の立場としては子どもを励まし見守り続けたいし、子どもは自立をして頑張ってもらいたい。何かあったときには兄弟で協力し助け合ってほしい。
- 今の時代、特に「死ぬ」「殺す」といった言葉を簡単に使っている様に思います。時代の流れと言ってしまうとそれで終わってしまいますが、私としては、せめて童話のように子どもが目にする物には「死」「殺」といった文字を使ってほしくないと思います。
- 全体を通じて子の自立ということの大変さと失敗に負けない心を持ち、やさしさを忘れないところ。
- 子どもに生命の大切さと努力することを教えたいため。
- 童話では夢と希望と人間らしさ、心の広い気持ちを育てたい。年齢的にはこの様な内容が適当と思う。
- 夢の持てる、また間違いがあっても挽回できるストーリーが教育に適している。
- 小さい頃聞いた話がこのような感じだった。
- 人を脅かしたりいじめたりすると、罰を受けますよという事を教えたい。

#### ■子どもにどんな人になってほしいか

##### AAB

- 状況判断のできる人。

##### ABC

- 人を思いやり優しい人。

##### BAB

- 冷静に判断できる人。人の気持ちのわかる人。

##### BAC

- ひとつでもいいから特技をもつ人。

##### BBA

- 人を思いやり優しい子。

## BBB

○健康で明るく、くじけない強い精神力をもった人。

## BBC

- 人に優しく、人の痛みのわかる人。
- 自立した（他人に迷惑をかけぬ）人。
- くじけず目標に向かって進むたくましい人間。
- ロマンの持てる人。創意と工夫ができ、世の中での経験を生かせる人。

## ☆対象 幼稚園児の母親 94名

## ■選択肢①で「A」を選んだ理由

○本来の昔話ではそうになっているとのことなので、realityがある一子どもをすんなりとお話の世界に導き入れるだけの説得力をもつ明解な出だしだと思う。

## ■選択肢①で「B」を選んだ理由

- 現在の日本では「貧乏のために子どもを育てられない」という状況を子どもに伝えるのは難しい。
- 親の自立と子供の自立のため、貧乏でも金持ちでもあてはめることができる。
- お母さんに励まされて元気に家を出たという内容で3びきの子ぶたに自立心が芽生えつつあるような感じがして良いと思ったから。
- AB両方を読んでみてAのただ貧乏という理由だけで、子ぶたを家から出してしまうのは、子どもたちが本を読んだ時に納得しないのではないかと思います。Bの自主性を育てるようなお話の方が良いと思い選びました。
- Aは子を育て上げるという当り前の義務を放棄している。親子の関係に愛情を感じられない。
- 自分が子どもの時に読んだ本がこういう筋書きだったので、必然的に…。
- 小さい子供達が読む本なので楽しいイメージで作って欲しい。
- 親と子の関係が自然に思えたから。
- 内容がとてもわかりやすく、お母さんぶたの会話にやさしさがある。
- 母親とは、いくら貧しくとも自分の手で子どもを育てるものだと思います。

## ■選択肢②で「A」を選んだ理由

○物語の中では、悪者（オオカミ）は徹底して悪い方が子どもにとって明解だと思う。また簡単に家を作った1番目の子ぶたと努力して（考えて）家を作ったぶたとの差が、食べられることによりはっきりするから。

## ■選択肢②で「B」を選んだ理由

- 三匹の子ぶたが主人公で、そんな簡単にオオカミに食べられてしまっただけでは、お話としてつまらないと思います。やはり三匹とも助かったほうが読む子どもにとっては、その後の話に期待がもてると思います。
- せっかく3匹の子ぶたがそれぞれに一生賢明作ったであろう家が簡単に壊されてしまうのは仕方ないにしても、食べられてしまうのでは、自立心の芽生えがへし折られたような感じがして良くないと思ったから。
- 兄弟が力を合わせて困難を乗り越えていくことを教えてくれるから。
- 食べられてしまうというのは、子どもに聞かせるには残酷なよう

な気がする。

- 何でもこつこつ努力し物事を良く考え一番いい方法で取り組むこと、そして、それによって自分を守る事を覚えていく。
- 自分が子供の時に読んだ本が、こういう筋書きだったので必然的に…。

## ■選択肢③で「A」を選んだ理由

○本来の昔ばなしでは、そうになっているとのことなので、前の選択肢で選んだものに続く結末として相応しい。残酷さ、厳しさの中にも、あっけらかんとしたユーモアが漂う。

## ■選択肢③で「B」を選んだ理由

○悪者には最後に相当の報いがある方が、子どもが読んでいて、気持ち落ち着くのではなにか？ その中で子どもながらに道徳感が生まれてくると思う。

## ■選択肢③で「C」を選んだ理由

- A、Bではオオカミが死んでしまうので、それからオオカミはどうしたかな、というお話の続きを考えることができなくなってしまっつまらない。
- 「死」ということが小さな子どもには理解できないし、逃げてしまったという方が、表現が柔らかいと思うから。
- 悪者だからといってすぐ死に追いやるのは子どもへの影響上良くない（命というものを軽く考えてしまう）と思うので懲らしめる程度で良いと思ったから。
- 悪い事をしたら痛い目にあうよ、ぐらいいいと思う。AやBは、とくにBは残酷すぎる。子どもに読んであげる気持ちにはならない。
- オオカミも死んでしまったらかわいそうなので、大火傷をさせてオオカミにも反省してもらいます。
- 童話（子どもを対象とするもの）においては、悪者が死んでしまうよりは、反省して更生し良い者へと変わったほうがよいのではないか。
- 自分がこどものときに読んだ本がこういう筋書きだったので必然的に…。
- 悪いことをすると、ある程度の罰が与えられるという事を子どもに知らせるために、Cがいちばんいいのではないかと思った。

## ■このようなお話の「すじ」にした理由

## AAAを選んだ理由

○(1) 本来のイギリスの昔話としては、そうになっているとのことなので、(文化遺産としての昔話を尊重して、ありのまま伝えるべきだと思う。(2) 楽しさばかりでなく、残酷さや恐ろしさなどをも、昔話や絵本を通して幼い子どもが体験することは、人間的成長にとって必要だと思います。

## ABCを選んだ理由

○死んでしまう、食べてしまうなどの表現の仕方は子どもの絵本には絶対に入れてほしくないと思ったから。

## BABを選んだ理由

○お話には子どもに夢を与えるものと、現実では体験できないスリルのものがあるが、このお話は後者の方で、その中でオオカミを悪者にすることで、正義感が生れ、三番目の子ぶたのように努力すること、賢くなること、悪に立ち向かえるという事を学べると思ったから。

## BBBを選んだ理由

○貧しければ皆で助け合った方がいいし、1、2番目の子ぶたが死んでしまうと最後のずっと幸せに暮らしたにはならないと思うから（幸せは皆で分かち合うものだから）。本当はオオカミも死んでほしくなかったのだが、二度と現れないといってもいつ現れるかと悪念されるから、それよりも人の痛みを感じ思いやりに触れて心を入れ替えて仲良くなるのがいいと思った。

#### BACを選んだ理由

○強い者に負けてしまうということを多少子どもにわかってもらうには残酷ですがいいと思った。

#### BBCを選んだ理由

- 「四方まるくおさまる」という感じ。
- 食べられてしまったり、殺してしまったりするより、その存在を生かしておいたほうが、楽しい気持で絵本を読めるような気がする。読み終わったあとも、子ぶた達はどのようにしているか、オオカミはその後どうしているかなど考える事もできる。
- 生きていくには色々なことがあるし、簡単に考えては失敗してしまうということを読んだ子にわかってほしいし、いくら悪い事ばかりしているオオカミでも最後には罰を受けるけど死んだということにはしたくないと思った。
- 死んでしまうことを話して聞かせるのは難しいし、この童話の主旨も生死をかけるほどのダメージなしに伝えられる。
- ニュース番組等で少年犯罪の低年齢化、目に余る犯罪の多発に心を痛めている。直接関連はないかもしれませんが、「人をやっつける」シーンが出てくるものには遠ざけたいと考えております。悪者をやっつけるというのもあまり好ましいとは考えておりません。
- 新聞、テレビゲーム等で殺人とか死などの言葉が目につく毎日です。大人も子供も心が和やかになれるような本が良いと思う。
- 努力すれば報われるということを教えたい。
- 子どもが成長していく段階でいろんな困難があっても、一人であるいは兄弟で力を合わせることで楽しく生きていけるとことを教えたいから。
- この物語を通して、努力して何かを作る、そして協力し合って兄弟やっていく、そういう思いを感じられる物語であってほしいと思います。
- 子どもが読むお話は怖いものではなく、夢があって楽しいものが多い。
- 昔読んだ本のストーリーがそうだったし、その反対は好ましくなかった。
- 特に理由はないのですが、子供に読み聞かせた本がこのようなストーリーになっていたのも、他には考えられませんでしたそれだと思ったから。

#### ■子どもにどんな人になってほしいか

##### AAA

○自分でよく考え、選択し行動し生きていける自由な人間になってほしい。さらにその生き方が利己的なものでなく、他者に向かって開かれたものであればよい。

##### ABC

○自分の意思をはっきりと言え、人の気持ちがわかる優しい人。

##### BAB

○自分で考え行動出来る自立した人。他人への思いやりのある人。

##### BAC

○負け心をもって強くなって欲しい。くじけても冷静になってもう一度「どうして」を見付けてトライ出来る人。

##### BBB

○臨機応変に行動でき工夫の出来る人。

##### BBC

- 優しく思いやりがあり何に対しても努力する人。
- 自分の意思をしっかりともち、どんな困難にも打ち勝つ強い精神をもった人。
- 心が広く、いつも夢と希望を抱いている人。